

(社) 東洋音楽学会関西支部

# 支部だより 第44号 (2002年8月25日)

Newsletter of the Kansai Chapter,  
Society for Research in Asiatic Music

## 定例研究会 (210回および211回) のご案内

### 第210回定例研究会 (日本音楽学会関西支部例会と合同)

日時: 2002年9月21日 (土) p.m. 1:00 -

場所: 大阪音楽大学・K号館

(阪急宝塚線庄内駅より徒歩8分の本校よりスクールバスあり)

内容: 修士論文発表とパネル

#### 1) 修士論文発表

上坂未央「ケージとフルクサス - パフォーマンスの問題を中心に」 (兵庫教育大学修士論文)

#### 2) パネル: 「復元」の試みにおける研究者と実演家の役割

コーディネイト・司会: 寺内直子 (神戸大学)

パネリスト:

津上智美 (神戸女学院大学): 西洋古楽における「復元」 - モンテヴェルディの演奏をめぐって -

広瀬信夫 (大阪芸術大学): 雅楽の「復元」について

北見真智子 (神戸大学): 能の「復曲」 - 〈菅丞相〉を例に

### 第211回定例研究会 (日本音楽学会関西支部例会と合同)

日時: 2002年11月9日 (土) p.m. 1:00 - p.m. 6:00

場所: 大阪大学・文13教室

(阪急電車宝塚線・石橋駅 (急行停車) 下車、東へ徒歩約15分。あるいは、大阪モノレール、柴原駅下車、徒歩約10分)

内容: 応用音楽学の可能性 シンポジウム + 特別講演

1) 「応用音楽学の可能性」 シンポジウム (p.m. 1:00 –

報告:

上野正章 (大阪大学) 「『応用音楽学』を読む、その成立について」

増田聡 (鳴門教育大学) 「応用音楽学—ポピュラー音楽の観点から (仮題)」

大久保賢 (大阪大学) 「応用音楽学—理論と実践 (仮題)」

コメント: ト田隆嗣 (大阪教育大学) ほか

2) 「応用音楽学の可能性」 特別講演 (p.m. 3:50 –

チャールズ・カイル (Charles Keil) ニューヨーク州立大学

ジェイソン・スタニェク (Jason Stanyek) カリフォルニア大学

サンディエゴ校

開催の趣旨: 「応用音楽学の可能性」

近年、大学が配布する履修要項に「応用音楽学」という科目が登場するようになった。分厚い冊子を開くと、おなじみの「民族音楽学」、「西洋音楽史」、「日本音楽概論」、「音楽美学」等に比して「応用音楽学」という科目がしばしば並置されている。講義内容を読んでもみるならば、「アート・マネジメント」、「生涯教育」、「音楽療法」といった魅力的な、しかし従来の音楽学においてはあまり馴染みのない用語が並ぶ。実践的・実学的傾向を強く打ち出した「応用音楽学」の躍進は、音楽学の新領域が開拓されつつあるかのようだ。放送大学の授業科目である「応用音楽学」も三年目を迎え、知らぬ間に、静かに、着実に「応用音楽学」は現代日本の音楽教育に浸透しつつある。

本シンポジウムは、このような「応用音楽学」の現状を概観しつつ評価し、その可能性を考えようとする試みである。とはいえこの学問、先に述べたように極めて豊富な要素が盛り込まれていて捉えどころが無く、迂闊に取り組むと徒に枝葉末節に目を奪われて、断片的な個々の事例の検討に終始するおそれがある。そこで本シンポジウムでは、特に放送大学教育振興会が発行している放送大学専門教育科目「応用音楽学」のテキストを中心に据え、「応用音楽学」についての考察を展開することを提案したい。『応用音楽学』は、1. この主題を包括的に取り扱った日本において唯一の書物であり、「応用音楽学」の理論書かつ実践の手引である。また、2. 当然のことながら、放送大学の講義テキストとして現実に使用されている書物でもある。「応用音楽学」の基礎文献として、議論にしっかりと応えてくれるだろう。

議論の観点としては、次のようなものが考えられる。例えば「互惠性」という考え方について。『応用音楽学』では、音楽を媒介にした人と社会との関係について注意を喚起することを提唱し、同時に未来志向を強調する。これはそのまま、全ての人間がどのように音楽的に生きるべきかという問題に通じるが、ここで行動の指針として示されるのが「互惠性」という考え方である。これは「応用音楽学」におけるキーワードの一つであり、幾つかの実践面からこの概念について考察を加えることは、興味深い結果をもたらすに違いない。

パネリスト達によるそれぞれの専門分野からの応用音楽学に関する報告の後、議論が展開されるだろう。『応用音楽学』の著者の参加があり、また、アート・マネジメント、社会教育といった分野の研究者の来場も見込まれる。現場の理論と学問の理論の狭間を探求することは、21世紀の音楽学を展望することにもなるだろう。

(文責: 上野正章)

## 定例研究会の報告

### 第208回定例研究会

日時：2002年4月20日（土）p.m. 1:30-5:00

場所：神戸大学発達科学部 C-101教室

内容：卒論・修論・博論発表会、講演

### 研究発表：田淵夏季「唱歌『故郷』の創作と現代日本における受容」

（大阪音楽大学卒業論文）

報告者：上野正章

日本には多くの愛唱歌があるが、中でも《故郷》の浸透ぶりは別格といってよいだろう。音楽教育、劇伴、儀式等、様々な場面における音楽に注意してみるなら、控えめに、しかし思いのほか頻繁に《故郷》の旋律を耳にすることができる。本発表はこういった《故郷》の際立った性質に注目し、驚くほど多様にアレンジされて、世代を超えて《故郷》が受け入れられたことに着目して、《故郷》の受容のメカニズムを探求するものである。

発表は《故郷》という歌についての紹介からはじまり、成立過程についての検討がなされた。文部省唱歌として1914年に作曲された《故郷》は、それゆえに日本の音楽教育システムに組み込まれたものの、同時に作曲に関して、拍子、調性等を簡素なものとするという制約が課せられたのである。次いで現代日本の社会において《故郷》がどの程度受容されているかという調査報告に移っていった。観点は、最近のマスコミ等における《故郷》の使用状況と、現代日本の高校生に対する《故郷》についての受け止めという二点である。まず、マスコミに関してであるが、主に放送が取り上げられ、実際の放送の現場で《故郷》が使用されているケースが紹介された。長野オリンピックをはじめとして実に様々な場面で使用されていることも指摘されたが、確かに放送における《故郷》使用頻度は相当高いようだ。他方、高校生の《故郷》受容に関しては、2001年現在、大阪府立茨木高校在学生の内の音楽選択者1、2年生に対して行われたアンケートに基づいて報告が行われた。《故郷》についての知識の有無から受け止め方にいたるまで、詳細な調査報告が行われたが、ほとんど全ての高校生が《故郷》を知っているということはよく考えると大変なことだと、改めて感じた。最後に結論では、西島央の提唱する日本における唱歌受容のメカニズムが援用され、マスコミによる《故郷》の絶え間のない反復と高校生の《故郷》の受け止め方から、一つの仮説が提唱された。現代の高校生達が《故郷》という歌から連想する「故郷」は、彼ら自身の体験から獲得された「故郷」というよりは、メディア操作によって刷り込まれた「故郷」ではないだろうかという仮説である。

質疑応答でまず問題になったのは、《故郷》の作曲者についてであった。文部省唱歌における作曲者の特定は常々問題になるところであるが、聞き取り調査によって《故郷》の作曲者が中山晋平であることはほぼ確定できるという重要なコメントがフロアからあった。次いで問題になったのは調査方法についてであった。本発表では大阪の高校生の集団270人を対象にして調査が行われたのだが、現代日本における《故郷》の受容調査ならば、さらに多くの年齢層に対しても行うべきであるという意見である。もちろん、調査地区の問題も指摘され得るだろう。大阪の受容のあり方がそのまま日本における《故郷》の受容状況を示しているとは限らないからである。こういった問いに対して発表者は、調査対象の充実に意欲的な姿勢を見せていた。今後の研究の進展が楽しみなところである。データの蓄積は《故郷》の受容に関して、地域による比較研究を可能にするかもしれない。ただし、データの蓄積の次には、それをどのように処理するかという問題も待ちかまえている。私見だが、本発表において統計調査—個人的・質的な要素を均して全体的・数量的なデータに還元する調査—において、幾つか回答を特に興味深いものとして比較的詳細なコメントを付け加えていた点が多少疑問に思われた。確かに、特に言及される個々のデータに対する指摘から啓発されるころはあったが、個々人の見解に注目しはじめると、統計処理を行う意味が曖昧になるのではないだろうか。なお、発表者によると、将来的には受容史というよりむしろ、現代日本の音楽文化に重点をおいて研究を進展させるそうである。さらなる受容のメカニズム研究の探求を期待したい。



## 研究発表：宮島幸子「校歌の研究」（大阪音楽大学卒業論文）

報告者：谷正人

本発表は、滋賀県の小・中学校を対象として、校歌の特性をその歌詞や音楽的側面から明らかにしようとしたものである。発表では、校歌の歌詞や音楽的特徴に対して様々に設定された切り口が紹介され、県内の201校から得られたアンケート回答をもとに、その結果が報告された。それによれば校歌の一般的な姿は、詩形については七五調あるいは五七調の定型であるが、楽式についてはフレーズの反復がない曲が69パーセントを占めており形式化されていないとのことであった。また発表者は校名の含まれるフレーズに特に着目し、そのメロディーラインは「山型」で5・6・8度の跳躍進行を持つこと、更に校名が歌われている校歌に特徴的なリズムパターンがあることなどを指摘した。

本研究は、普段おぼろげな形で感じられている「校歌らしさ」とは、一体どのような実体を持つものなのかを実際のデータから探ろうとする、大変興味深いものであった。ただ残念だったのは、様々に設定された切り口のそれぞれが一体最終的に何を浮き彫りにする為にそう設定されているのか、調査者が切り口の設定に込めた意図というものが十分には説明されなかった事である。もちろん考えうる限りの切り口を準備しておくことは、調査の初期段階においては当然かもしれない。しかし後に調査の方向性が定まってゆき、またその中で「何か」が見えつつあるのであれば、切り口もそれに従ってより必然性を帯びた形で提示できるはずである。切り口の順序や相互の関連にも論旨を左右する重要な役割があることがそこでは理解されよう。

質疑応答ではまず、滋賀県において最も多く校歌を作曲した岡田二郎氏について触れられた。発表者が当初抱いていた「校歌らしさ」や本発表で示された数々の音楽的特徴が岡田氏の作風にどれくらい重なりあうものなのか、そうした氏の影響を見るためには岡田氏の年代別の作品リストや調査対象となった校歌のスタイルの変遷を時代別に追う必要があるのではないか、との指摘がなされた。また学校唱歌との関連から、文部省唱歌で育った世代の教師達の影響という点からの研究の可能性も指摘された。

本発表で示されたデータは、それぞれが個別に掘り下げてみたくなるような興味深い結果を示していたように思う。それらは必ずしも「校歌の研究」という名のもとに集約することはできないかもしれないが、逆にその事が本研究のより幅広い発展の可能性を示唆しているように感じられた。

## 研究発表：寺田真由美「宴会文化の中の音楽--昭和30年代の小唄ブームと民謡ブームを中心に」（神戸大学修士論文）

報告者：廣井榮子

音楽研究においても近年「昭和」が射程に入れられるようになった。70年代のカラオケが登場する以前には、どのような音楽シーンがみられたのだろうか。

本研究は、昭和30年代の都市部（東京・大阪）サラリーマン層にみられた小唄と民謡のブームを、「宴会文化」としてはどのように捉えられるかを考察したものである。発表者は、「宴会文化」を「特定の機会に特定の目的を持って集い、飲食することを通じて参加者同士が打ち解け合う文化」と定義づけた上で、ブームを引き起こした「音楽学的要素」と「社会的要因」の二つを取り上げて論じた。前者を成り立たせた小唄・民謡に共通の「早い・短い・覚えやすい」という特徴は、テンポのゆるやかで演奏時間の長い旧来の邦楽に比べると初心者には抵抗なく受け止められ、しかも「口伝」による稽古というのも五線譜に不慣れな人には馴染みやすかったという。一方、社会的要因としては、音楽が宴会の余興に欠かせなかったことが彼らを稽古へと駆り立てたと述べた。とりわけ、小唄では「粋の世界」への懐かしみ、民謡には「ふるさと」を懐かしむ気持ちが根底にあり、それらの「内包するノスタルジー」は異なるものの、宴会という場において小唄や民謡を歌うという行為によって「共有」できたと結論づけた。

報告者として、気づいた点をいくつか挙げておこう。まず、発表者に既知の事柄というのは聞き手には必ずしもそうではないことがある。たとえば、饗応の場としての宴会がどのようなファクターによって「宴会文化」と呼べるものになり、それはこれまでの「座敷芸」と

どこで線を引くことができるかといった発表テーマともかかわる問題が辞書的な説明にとどまったために、発表者の意図がつかみにくくなった。また、「爪弾き」という小唄の三味線奏法には触れられたが、さまざまな意味合いで使われた「小唄」の歴史や具体的な楽曲がもう少し述べられていたなら、聞き手は小唄の世界をある程度はイメージできたと思われる（フロアから、小唄史における昭和30年代についての質問もあった）。「民謡」についても然りである。大部の修論を圧縮して発表する難しさはあるが、発表のねらいを明確にするとともに、プレゼンテーションの工夫も望まれる。

さて、内容にかかわることだが、「宴会」というのは顧客に相応した場が設けられるのがふつうで、音楽が「宴会」に必須のツールであるなら、そうした場を想定して邦楽ジャンルも選ばれたはずだ。加えて、サラリーマンの属した「階層」とジャンルに伴うステータスとの関係もまだこの時代には残っていて、稽古のしやすさやサラリーマン個人の嗜好・適性よりも優先されたのではないだろうか。それから、座敷芸風にアレンジされた民謡や小唄であれば、プロの演奏の合間に素人の「座興」が混じることにも許容されただろう。そうだとすれば、「宴会」の場を客層のまったく異なる民謡酒場から料亭までと一括りにして論ずるのはいかなものか。いずれにせよ、小唄と民謡という相容れない二つの音楽が「宴会」音楽シーンをどのように彩ったかは、発表者自身の中でそれらがいかに有機的に結びつけて考えられているかが語り尽くされない限り、聞き手には単なる「並行現象」とうつることになる。細かいことだが、「マニュアル本」という表現も気にかかった。新規開拓のジャンルであればこそ、従来顧みられなかった文献をも基礎資料として紹介し、なぜ実名執筆が憚られたのかといった邦楽の「内部」事情も含めて質問に答えてもらえればなおよかったと思う。

発表者には邦楽の素養もあると聞くので、今後はその知識・経験を生かし、幕末以降の小唄の流れと昭和のそれとを歌詞分析も含めて見つめ直し、明治期の「小歌曲」志向と戦後のそれとの違いを明らかにすることによって、従来の研究に欠落していた部分を補って「戦後」の音楽シーンを描出してもらいたい。新しい研究テーマであるだけにさまざまな困難もあるが、着実な研究の積み重ねが期待される。

## 講演：マーガレット・サーキシアン「『正統性 Authenticity』の問題に関する3つのヴァリエーション」

報告者：福岡まどか

この発表は、“authenticity”という概念を取り上げて、その定義をめぐる3つのヴァリエーションを提示し、民族音楽学研究におけるこの問題の重要性を考察したものである。

サーキシアン氏によって提示された3つのヴァリエーションは以下に要約される。

第1のヴァリエーションは、アメリカにおける「アカデミックなヴァリエーション」と呼ぶべきもので、人類学者エドワード・ブルナーの提示したモデルに基づく。ここでは、ブルナーの研究成果が紹介された。ブルナーは、“authenticity”という概念が含む4つの意味、すなわち、真実らしさ、真正性、オリジナリティ、権威、という意味を検討し、イリノイ州スプリングフィールド市近郊のLincoln's New Salemという「歴史村」を対象として研究を行った。

第2のヴァリエーションは、サーキシアン氏が日本に滞在中に考察したいくつかの事柄に基づく。伊勢神宮のモニュメントの20年毎の再建を例に、日本と西洋の建築における“authenticity”のあり方の相違を指摘する。また、雅楽を例に、音楽的な“authenticity”のあり方への様々な問題提起が提示された。

第3のヴァリエーションは、サーキシアン氏自身の調査地であるマラッカにおけるポルトガル系コミュニティでの音楽活動を考察した成果である。ここでは、ポルトガル系住民の居住区における音楽と舞踊の上演をレパートリーが主な対象とされた。居住区の人々は、音楽のレパートリーを「我々の音楽」と「ポルトガルの音楽」と呼んで区別している。「我々の音楽」はさらに2つに分けられ、第1は、1950年代に上流階級のユーラシアンたちが書物から学んだレパートリー、第2は、1967年から72年のマレーシア建国の重要な時期に居住区の住民たちが創ったレパートリーである。また、「ポルトガルの音楽」とは、1974年以降にポルトガルから導入されたレパートリーを指す。サーキシアン氏は、これらのレパートリーの成立の歴史的経緯を考察し、またその伝承が次第に変化していることを明らかにする。

そして、我々は、「伝統」の発見と再発見のプロセスによって“authenticity”のローカルな構築が引き起こされる瞬間に常に立ち会っている、ということを指摘する。



民族音楽学の研究における"authenticity"という概念の重要性に焦点を当てて、音楽的な事象を検討していこうとするサーキアン氏の指摘と、この概念についての研究成果の検討は非常に示唆的なものであった。また、調査地であるマラッカのポルトガル人居住区の音楽的レパートリーについての報告は、"authenticity"についてのローカルなアイデアを提示するという興味深い問題を含んでいると感じられた。その一方で、特に第3番目のヴァリエーションの中で言及されたマラッカのポルトガル人居住区では、この"authenticity"という概念がどのように問題とされているのか、ということについての詳細な検討の必要性も感じられた。居住区の人々が、"authenticity"に相当するフォークタームとしていかなる言葉を用いているのか、あるいは音楽的な価値のあり方を"authenticity"という概念を指標として論じているのか、といった問題を含めて、今後のより詳細な研究がなされることを楽しみにしたい。

## 定例研究会の報告

第209回定例研究会（卒論、修論、博論発表会その2、民博展示見学）

日時：2002年6月22日（土）p.m. 1:30-5:00

場所：国立民族学博物館 第1演習室

内容：卒論・修論・博論発表会、民博特別展示の見学

研究発表：植山視保子「バリ島のゲンジェツ・パフォーマンスの成立と展開」（京都市立芸術大学修士論文）

報告者：福岡まどか

植山氏による研究発表は、バリ島で1980年代に成立したとされるゲンジェツという芸能に焦点を当てたものである。ゲンジェツは、約10-20人の男性によって演じられる声楽のジャンルである。植山氏は、修士論文において、バリ島の芸能におけるゲンジェツの位置付け、その成立と展開の歴史的考察、パフォーマンスの分析、などの諸点に関する記述を行い、これまでほとんど研究のなされてこなかったこの新しい芸能ジャンルに関するデータを提示した。

発表の中では、主にパフォーマンスの詳細な分析結果が述べられた。植山氏は、1974年に村の共同体組織をベースとして活動を始めたグループである「スプラス・ブルリアン」と、1996年に公的な上演活動を目的として結成されたグループである「ゲンジェツ・ストレス」という2つの対照的なグループの演奏を取り上げて、楽曲の中のチパツと呼ばれる部分を中心に分析を行った。その結果、パフォーマンスの中で、リズムの複雑なテクスチュアが発展していくプロセスを指摘した。特に、ひとつのリズム・パターンにおける奏者同士による各パートの交換や移動、臨機応変なリズム型の変化の例、リズム・パターン化された詩句や感嘆詞の挿入例、などを提示しつつ、ゲンジェツのパフォーマンスにおける各パートの重なりの様相が、映像資料と楽譜によって詳細に提示された。

今後は、日常的な生活や社会関係と、これらの上演の特質との関わりを考察していきたいとする、植山氏の研究にさらなる成果を期待したい。

研究発表：大渡敏仁「播州の毛獅子舞の研究--その伝播・伝承・変容をめぐって」（大阪芸術大学博士論文）

報告者：丸太弘治

本論文は、兵庫県播磨地方に伝承されている伊勢大神楽系獅子舞と毛獅子と呼称される獅子舞を扱うものであった。このたびの発表では、とくに、毛獅子の分布に焦点が当てられた。発表者がおこなった現地調査の中から、具体例として、毛獅子の固有の演目であるく梯

子獅子>の中の梯子上りをビデオで見せ、旋律の一部分が楽譜によって提示された。

とりあげられたのは三つの地区のものである。三地区とも、楽節の長さや早さの違いがあるものの、よく似た楽節構造をもっていた。二段目の楽節については、同一の楽節と考えられると報告された。演奏者の年齢によっても少しちがった演奏になること、リズム感も少し違ったものになってきているということが指摘された。

報告者自身は、大阪市内で“だんじり囃子”の伝承を続けているので、以下、その経験に引きよせながら、発表の感想を述べてみたい。

大阪市内の民俗芸能には、50以上の“だんじり囃子”（鉦・小太鼓・大太鼓）がある。だんじり曳行中に演奏する、「道中」と呼ばれる囃子がある。鉦のリズムはどこも変容なく、同じリズム構造をもっている。「チンチキチンチキジッコンコンチキ」を繰り返して演奏し、大太鼓はそのリズムに合わせて、自由に演奏（鉦の「コンコン」のところだけは、大太鼓も「ドンドン」と強く打つ）してもよいことになっている。リズムの崩しかたは、人によって色々であるので、自分の崩したリズムが間違っているのではないかという心配をいだきながらも、伝承を続けている。

さて、本題の毛獅子にもどる。毛獅子の梯子獅子の前半部分には、自由に演奏してもいい部分があったと思われる。そのいっぽうで、最後の部分には掛け声の入る部分があった。この部分は、リズムを崩さずに演奏される部分であったと思われる。リズムを崩さず演奏する理由としては、掛け声を合わす必要があったためであろうと考えたい。そしてその理由によって、三地区とも共通した囃子がおこなわれているのではないだろうか。報告者は以上のような感想をもった。

民俗芸能においては、ほとんどの場合、「裏打ち」すなわち伝播・伝承の中でほとんど変化しない部分と、「表打ち」すなわち演奏者自身が自由に演奏し、個人の個性により変容する部分があり、両者の二段構造が見られる。この二段構造が、研究する上での大きな障害になっていると思われる。しかしそれは、民俗芸能の面白い点でもあると思われる。

## 研究発表：田鍬智志「舞楽左方舞の動作様式に関する史学的研究」（大阪芸術大学博士論文）

報告者：寺内直子

古楽譜を用い、雅楽の音楽を復元的に明らかにしようとする歴史的研究は現在までかなりの数にのぼる。それに比して、舞楽の舞（動作）に焦点を当てた歴史的研究は少ない。その理由として、楽譜にくらべ舞譜史料が量的に少ないこと、そして、舞譜が、動作をごく簡潔な用語に置き換えて連ねるという記譜原理であるため、動作の具体的な復元が著しく困難であることなどがあげられる。田鍬氏の博士論文は、その困難に正面から取り組み、舞譜史料解読の可能性と限界を明らかにした誠実な研究と言えよう。

論文は大きく、中世に成立した舞譜『掌中要録』を分析した第一部と、中世から今日に至る舞楽の伝承の変遷をいくつかの異なる観点から扱う第二部に分かれる。当日の発表では、第一部から、『掌中要録』に見られる「去肘」「落居」「足踏」などの用語（田鍬氏はこれを「譜語」と名付けている）の解釈、第二部から、戦国期の舞楽の演目の変遷、近世初頭の舞譜と現行『舞楽譜』（明治撰定譜）の譜語の変遷、絵画史料に見られる舞楽の身体構図の変遷などに関する説明が行われた。

田鍬氏の譜語の解釈は、基本的にその譜語に関する『教訓抄』『続教訓抄』などの楽書の説明の分析、舞譜に見られる譜語の種類と出現の頻度や周期性、前後の関係や省略の仕方など舞譜内部のシステム分析、そして、成立年代の異なる複数の舞譜の比較分析から成っている。氏によると「落居」という動作は、『掌中要録』の頃は、現在より音楽のテンポが早かったと仮定し、『教訓抄』『続教訓抄』などの舞の記述を勘案すると、跳躍の要素が含まれていた可能性があるという。現在、この型は足を開いた状態で腰を落とす動作となっている。また「足踏」についても、現在と異なり、足の裏を床面から離す要素が含まれた動作であったと推測している。現在、この語は、片方の足をかかとを着けてつま先は離すという状態から、その足に体重を移動させ、足全体を床につけて「踏む」という動作を指す（つまり足裏は床から離さない）。さらに、氏は、譜中で単に「右足」「左足」と表記されている譜語は、この「足踏」の省略であり、この動作がある周期の中でいくつか続く場合は、動作のタイミングを示す情報を含んでいたのではないかという仮説を示した。音楽に合わせて具体的にどのような動作進行になるのかは今一つイメージがつかめないが、舞譜の譜語が空間に

おける身体動作を指し示すだけでなく、楽曲の進行と関連した時間的な要素も持っていたという仮説は興味深い。

この「足踏」については、氏は第二部で、『舞図（信西古楽図）』や『春日権現験記絵』『舞楽図屏風』（安藤家本）など中世から近世初頭までの絵画史料に見られる、右足と左足が前後（または上下？）にずれたように見える前傾姿勢の舞人の図に描かれているポーズを、この「足踏」ではないかと推測している。

さらに、氏は、江戸初期の舞譜「東友安左方舞譜」（1634）と『舞楽譜』（明治撰定譜）の譜語を比較し、前者に見られる「ふミ」という譜語が後者では「摺」という譜語に置き換えていることを指摘した。この意味について、筆者が発表の場で質問した時には、氏から明解な答えはいただけなかったが、以下のようないくつかの可能性が考えられよう。1.動作の名称だけが違って、動作様態は変化しない。2.動作様態の変化とともに名称も変わった。ちなみに、現在の「摺」は、片方の足を床から少し揚げ、軽くはたくように着地させる動作である（ちょうど筆で「一」という字を書くときのように）。1.の解釈では、少なくとも江戸初期の「ふミ」は現行の「摺」のような動作だったことになる。氏の分析では、中世の「足踏」も床面から足裏を離す動作、というから、足を床から軽くあげて着地させる現在の「摺」は、意外に、中世の「足踏」と同じような動作だったかもしれない・・・と、この報告を書きながらふと思いついた。しかし、現在の舞譜には、「摺」のほかに「踏」の譜語も見える。それでは、現在「踏」の語が見える個所に、「東友安左方舞譜」ではどんな譜語を当てているのか・・・

当日は時間の関係で、詳しいお話をうかがうことができなかったが、いずれ出版という形で、もう一度じっくり向かい合いたい研究である。

\*\*\*\*\*

## 関西支部からのお知らせ

### ●関西支部定例研究会への発表申し込み方法について

関西支部では、定例研究会での会員相互の活発な活動を期待しています。研究発表等は下記の宛先にお申し込み下さい。

〒656-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 寺田吉孝（例会・広報担当理事）研究室気付 e-mail: terada@idc.minpaku.ac.jp

### ●入会申し込み方法・住所変更について

入会ご希望の方は、80円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求下さい。住所等の変更につきましても同事務所までお知らせ下さい。

〒110-0001 台東区谷中 5-9-25 第2八光ハウス201号（社）東洋音楽学会  
電話：03-3823-5173 ファックス：03-3823-5174 e-mail: LEN03210@nifty.ne.jp

### ●お詫びと訂正

『支部だより』第40号（2001年3月30日号）から第43号（2002年3月20日号）まで関西支部連絡先の櫻井研究室の電子メールアドレスが間違っておりました。ただし電子メールアドレスは、e-mail: sakurait@hannan-u.ac.jp です。ここに訂正しお詫び申し上げます。

---

発行：（社）東洋音楽学会関西支部

〒580-0033 松原市天美南 1-108-1 阪南大学南キャンパス  
櫻井研究室気付 e-mail: sakurait@hannan-u.ac.jp